

# 八重と会津落城 星亮一著

〈評〉金山等・山形大名誉教授

戊辰戦役で会津落城のみぎり、城主松平容保の義姉・照姫のもとに一致結束した女子軍団の奮戦ぶりは今も歴史の語り草である。「固より死を決し、從容として弾丸を畏れず」看護や炊飯の労役に従事するかたわら、みずから武器をとつて乱戦に突入する婦人もいた。なかでも山本八重は7連発スペンサー銃で石垣の上から敵を狙撃して百発百中、敵の心胆を寒がらしめた。決死隊に加わろうとして制止されたこともあつたという。男まさりのはげしい気性であつたらしい。

しかし本書は、八重の個人的な伝記ではない。「あとがき」にあるように「会津藩全体の流れのなか」に八重を位置づけようとした歴史書だといえる。まず幕末の情勢を俯瞰し、しだいに落城にいたる会津藩に焦点をあわせていく。すでに「奥羽越列藩同盟」「会津落城」などの著者である星亮一氏にとつては自家薬籠中の分野であろうが、会津藩ばかりでなく仙台藩や米沢藩における人間群像もそつなく描き出されている。たとえば八重の兄・覚馬と昵懇であった米沢藩の宮島誠一郎やその実弟・小森沢琢藏など。ちなみに覚馬は当時大砲頭取であり、八重に鉄砲の扱いを指南したのはこの兄であった。

本書は、歴史悲劇にともないがちな美談調とは無縁である。一貫して透徹した史観にもとづく記述であり、しかも簡潔で要を得ている。史書特有の晦渺さはない。特徴は時おり辛口な口調をおびることで、いたずらに犠牲者をだした会津藩の無能な指導者層に対する批判はとりわけ手厳しい。仙台藩についても、その藩士の後裔だという著者の舌鋒はぶれることがない。厳正な史眼のしからしめるところであろう。タイトルが示すように、落城後の八重についての記述はないが、当時の歴史的状況を把握するのに最適の一書といえよう。1870（明治3）年、八重が米沢に身を寄せていたことを示す資料が最近発見されて話題を呼んだ。著者もいち早く関心を寄せて言及している。星氏は東北大国史学科卒。福島民報記者、福島中央テレビ報道制作局長を経て作家に転身した。福島県郡山市在住。

（PHP新書・798円）

